風土記の丘の花だより342

今、そしてこれから見られる植物（2026年10月17日）

ハギの花が散り始め、ツワブキの花が咲き始めました。少しずつ季節がすすんでいるのを感じます。今回も秋の草花を４つ紹介します。なお来週の土曜日、３４３号の発行は午後からになりますのでご了承ください。



イガイガした実でお馴染みの「ひっつき虫」オオオナモミです。オが３つも続く名前です。最初の２つは「大きい」という意味、３つめのオも大きいという意味です。ナモミは「なもむ」という「くっつく」という意味の古い言葉が語源です。ですから、「衣服にくっつくとても大きな実」とい意味の名前ですね。こんな実をつけますが、これでもキク科の植物です。子どものころ投げ合ってよく遊んだものです。ふつうオナモミとよんでいますが、オナモミはほとんど見ることができません。



２つめはコメナモミです。コは文字通り小さいという意味、メはオに対して小さいという意味です。上のオオオナモミと反対で、とても小さなナモミということですね。オオオナモミは鉤状の刺でくっつきますが、これは粘液でベタベタくっつきます。といってもそれほどの粘着力はありません。これもキク科の植物です。黄色い花を見ると、そんな感じがしないでもないですね。このように、草の名前の意味がわかると、名前を覚えやすいし、愛着も湧き、その草が愛おしく思えてきますね。



変わった形の実ですが、色がきれいですね。これからもっと濃くなりきれいになります。イシミカワというタデ科の植物です。これは園内ではなく、大池の北の堤で見つけました。数年前までは周辺にたくさん生えていたのですが、草抜きなどが重なり、見られなくなっていました。それがこのたび一株だけ見つかったのです。実も独特ですが、葉が三角で茎が刺だらけというのも特徴です。もっと増えてくれればいいのですが、刺だらけの雑草は、植物に興味のない人にとって邪魔者以外の何者でもないのです。



これもタデ科の草でイヌタデです。イヌは役に立たないという意味ですから、役に立たない、すなわち食べられないタデとう意味です。今ではそんな光景はほとんど見ることはありませんが、子どもの頃ままごとで赤飯にして遊んだ思い出のある方もいるのではないでしょうか。野遊びという言葉がありますが、今の子どもたちには野に出て野の事物に触れながら遊んでほしいものです。　　松下